

新出 松廣寺藏『無常經新鈔』斷簡について

朴鎔辰

(佐藤厚訳)

〈目次〉

1. はじめに
2. 『無常經新鈔』の著者と書誌事項
3. 『無常經新鈔』斷簡の構成と内容
4. 『無常經新鈔』と『無常經』の註釋書
5. おわりに

1. はじめに

高麗時代の義天が編纂した『新編諸宗教藏總錄』（以下、『教藏總錄』）は1090年に成立し、經律論の諸宗章疏1010部が入録されている。この『教藏總錄』に書名だけが伝わっていた省辯の『無常經新鈔』（以下、『無常新鈔』）の斷簡が、2018年に行われた全羅南道順天市の松廣寺の五十三佛圖の腹藏囊調査の際に発見された¹。高麗大藏經研究所では、高麗諸宗教藏の結集事業の一環として、より詳細な書誌調査を実施した。

この省辯『無常新鈔』は義淨譯『佛說無常經』（大正藏17卷所収、以下『無常經』）の註釋書である。註釋対象である『無常經』は、韓國佛教だけでなく、漢文佛教文化圏の生死觀念や佛教の喪禮などに關聯した重要な文獻であり、²宋代の『釋氏要覽』、『禪苑清

* 本論文は、2018年12月1日、東アジア佛教研究会において日本語で発表したものを修正したものである。發表に際しては、コメントを担当してくださった前川健一先生から引用文獻や典拠についての情報を頂戴した。また、佐藤厚先生には文章の校正と翻譯を担当していただいた。深く感謝を申し上げる。

¹ 本稿で扱う『無常新鈔』は、松廣寺佛祖殿舊藏で、現在は華嚴殿に所藏された五十三佛圖腹藏囊から発見された。本資料は松廣寺の古鏡スニム、金泰亨學藝士が紹介し、高麗諸宗教藏事業の一環として、2018年7月16日に慶北大學校の南權熙教授の調査に基づき、筆者が學界に紹介することになったものである。資料調査に協力してくださった松廣寺と高麗大藏經研究所に感謝申し上げる。

² 佐々木教悟「根本說一切有部と三啓無常經について」（『印度學佛教學研究』38、1971年）、岡部和雄「『無常經』と『臨終方訣』」（『佛教思想の諸問題—平川彰博士古稀記念論集』、1985年）、釋舍幸紀「根本說一切有部に引用される無常經」（『印度學佛教學研究』67、1985年）、石破洋「敦煌本無常經講經文の研究—ペリオ二三〇五を中心に」（『佛教研究論集：橋本博士退官記念』、1975年）、木村高尉「無常經」（『佛教の歴史と思想—壬生台舜

規』などに引用されている。ここで『無常經』テキストの問題について觸れておくと、現行の『無常經』には「臨終方訣」というものが付いている。これは臨終しようとする者に対する佛教徒の處置や葬法に関する記述であり、宗教風俗の資料としても貴重なものである。³ただ『高麗大藏經』所収本など本来の『無常經』の姿を伝えるものには「臨終方訣」は付いておらず、のちに付加されたものである。

『無常經』の先行研究では、諸種の大藏經の入藏本や敦煌遺書の傳本が分析されたほか⁴、近年では南傳大藏經をはじめ目録類を通じた『無常經』の傳譯状況が紹介されている。⁵

これに對して『無常經』の註釋書についての研究は全く行われていない。『無常經』の註釋書としては、『教藏總錄』に法藏、省辯、遇榮の註釋書が確認されるが、すべて逸書として扱われてきたからである。こうした中、前述のように2018年に省辯の註釋書の斷簡が発見されたのである。これにより『無常經』の註釋のされ方や受容のあり方について具体的に明らかになることが期待される。本稿では『無常新鈔』新出斷簡の書誌情報と内容などを紹介する。

2. 『無常經新鈔』の著者と書誌事項

1) 省辯について

『無常經新鈔』の撰者、省辯の傳記は史傳には見出せず、譯經に参加した内容だけが宋呂夷簡等編『景祐新修法寶錄』（1037年）に確認される。まずその部分の全文を紹介する。

眞宗皇帝御製 注釋釋典文集一部三十卷總錄一卷

右天禧四年春二月沙門祕演等表請 以御製述釋典文章命僧箋注附于大藏詔可乃選京城義學文學沙門簡長行肇惠崇希白鑿深重杲鑿微尚能楚文曇休普究禹昌永興善昇清達祕演善初繼興希雅仲熙省辯崇璉顯忠令操義賢瑞王無象行圓有朋文倚同箋注令左右街僧錄守明澄遠 譯經三藏惟淨 參詳翰林學士楊億劉筠晏殊 樞密直學士王曙同詳覆又詔宰

博士頌壽記念』、1985年）、釋舎幸紀「無常經の思想史的意義—特に「無量光佛禮讚文」への展開を求めて」（『高田短期大學紀要』4、1986年）

³ 鎌田茂雄編『大藏經全解説大事典』（雄山閣出版、1998年）237頁。第801番の佐藤秀孝『佛說無常經』解題。

⁴ 岡部前掲論文、1985年。

⁵ 白金銑「『佛說無常經』的傳譯與喪葬禮儀」（中華佛學研究所『中華佛學學報』20、2007年）これは主に「無常經」の傳譯を明らかにしたもので、敦煌寫本の「無常經疏」等の註釋書の分析ではない。

臣丁謂都大參定 五年秋書成進御鑲板流行賜謂等器幣衆僧師號紫衣服茗帛度童行有差⁶

これによると省辯は天禧四年（1020）に宋の眞宗皇帝御製の「注釋釋典文集」1部30卷、總錄1卷を大藏經に入藏するとき、義學文學沙門に選抜され京城で活動した。この註釋事業は沙門祕演などの表請と皇帝の詔勅で行われ、官僚と義學文學の参加を通じて進められた。

義學文學沙門は簡長、行肇、惠崇、希白、鑿深、重杲、鑿微、尚能、楚文、曇休、普究、禹昌、永興、善昇、清達、祕演、善初、繼興、希雅、仲熙、省辯、崇璉、顯忠、令操、義賢、瑞王、無象、行圓、有朋、文倚など、省辯を含め全體で30名が參與した。また箋注では同箋注令左右街僧錄守明、澄遠の2名、譯經三藏惟淨が参加した。註釋事業全般を管掌した官僚としては參詳翰林學士楊億、劉筠、晏殊、樞密直學士王曙、同詳覆又詔宰臣丁謂が都大參定に活動した。これらの中で『教藏總錄』に撰述が傳わる人物としては『法界觀門集解』を撰述した有朋、『百法論聚拾鈔』を撰述した崇璉などの名が確認される。

以上から、省辯の生涯は明らかでないが、宋の天禧四年（1020）を前後して活動した人物であることがわかる。彼の著作には、『無常新鈔』のほかに『教藏總錄』に「天請問經廣勝鈔二卷科一卷」がある。これも宋代に著わされて高麗に傳來し、義天の『教藏總錄』に入録されたものと考えられる。

2) 書誌事項

『無常新鈔』斷簡は13-14行の板面を持ち7張からなる。書誌事項は次の通りである。

板尾題：無常新鈔下之一[張次]

板種：木版本

裝訂：線裝5針目の針眼存

大きさ：半面28cm 推定

張數：半面7張(前半3張、後半4張)

卷次：下之一

邊欄：四周單邊

行字數：28行20-23字

紙質：藁精紙

⁶ 宋呂夷簡等編『景祐新修法寶錄』卷13(『金藏』112・227中)

まず板尾題に「無常新鈔」とある。これを『教藏總錄』に検すると、『無常經』の項目に「新鈔六卷 科一卷 省辯述」とある。よってこれが省辯「無常新鈔」であることは間違いないであろう。續いて分巻を見ると、斷簡の巻次は「下之一」であるため、本来は上中下、または上下に分巻されていたと考えられる。行字数は28行20-23字で松廣寺所藏の他の教藏關聯章疏の行款と類似している⁷。邊欄は四周單邊であり、線装5針眼の針眼の形が残っているが、巻軸装が前提されたもので後代に改装された痕跡を見ることができる。紙質は藁精紙で、朝鮮時代前期に印經されたものと推定される。

前述したようにこの『無常新鈔』斷簡は2018年に行われた松廣寺の五十三佛圖腹藏囊調査で発見された。五十三佛圖の造成時期は腹藏囊の中の「回向發願文」によると、朝鮮時代の英祖元年（1725）と推定される。

その記録の一部は次の通りである。

1-①回向發願文

雍正三年(1725)乙巳五月日

1-②一切如來全身舍利寶篋眞言

別座圖解化士必閑/

雍正三年(1725)乙巳四月日全羅道順天松廣寺五十三/

佛幀八相幀三十三祖師幀十六羅漢幀畫成時刊刻/

これをまとめると、雍正三年、すなわち朝鮮英祖元年（1725）4月に五十三佛幀をはじめ八相幀、三十三祖師幀、十六羅漢幀を畫成し、「一切如來全身舍利寶篋眞言」を木板に刊行した。「回向發願文」の記録には藥師會圖があるが、「一切如來全身舍利寶篋眞言」には記録されていない。また、諸佛畫の發願主體は別座圖解と化士必閑とが中心となり、その他、義謙、處澄、慧察、朋眼、即心、幸宗、亘陟、懷眼、向敏、良運、採仁の僧名が確認される。

このように『無常新抄』斷簡は1725年に造成された五十三佛圖腹藏囊に納入されたことから、ある時期までは松廣寺に完本が傳存した可能性が考えられる。また、同じ腹藏囊から窺基撰『瑜伽師地論略纂』第7卷第24張の斷簡と一緒に発見された。これは30行24字の板本で、刊行時期は明確でないが、紙質から見て15世紀後半に制作されたものと推定される。これら兩本は『教藏總錄』に収録されたものであるから、高麗傳本の系統と見ることができる。

⁷ 『金剛般若經疏開玄鈔』30行21-22字、『大乘阿毘達磨雜集論疏』30行22字、『成唯識論了義燈抄』28行23字、『成唯識論述記』22行21-22字、『成唯識論義景鈔』20行20字、『圓覺經大疏釋義鈔』30行20字などである。30行である可能性も排除できない。

『無常新鈔』斷簡の刊行形態については、朝鮮時代の刊經都監から刊行された高麗時代板木による刊本、刊經都監の重修本、刊經都監の筆寫の板刻本など、いくつかの可能性を想定することができる。刊記の部分が存在しないために詳しいことはわからないが、高麗以來の傳本、または重修本の可能性はあると考える。その根拠として、松廣寺に所藏される章疏には、法寶『涅槃經疏』のように『教藏總錄』に入録した典籍の重修本が傳存しているからである。そこから『教藏總錄』で書名が確認される『無常新鈔』と『瑜伽師地論略纂』斷簡も、教藏に關聯した傳本の可能性が考えられるのである。もしこれが『教藏總錄』に入藏された高麗板本であるとすれば、高麗の宣宗代（1083-1094）から肅宗代（1095-1105）の間に刊行されたものと推定することができる。そうすると義天の東アジア佛教界での教藏の収集と刊行に直接的に關聯することになるが、現段階では推論にとどめる。

3. 『無常新鈔』斷簡の構成と内容

『無常新鈔』斷簡は、巻次は卷下之一で半葉7枚が傳わる。開囊時には混在されていたため張次はわからなかった、本稿では張次の文脈を通して推定し排列した。ただし欠落があるため完全ではない可能性もある。以下、構成と内容を見る。なお巻末に翻刻を掲げた。

まず「17左」と「18右」を見ると、「17左」は、「遊城止園」（17左1行⁸）と「證大涅槃」（17左2行）から始まり、續いて「居豐德者爲表」（17左2行）と「破四種顛倒之德」（17左2行）に言及する。その内容は『無常經』前半部の、偈頌に續く本文「如是我聞一時薄伽梵在室羅伐城」⁹の註釋に該当する。ここから、第17張は本文の註釋部分に相当し、本斷簡である卷下より前の部分では、經題や序文、偈頌などの註釋が行われていたと推測される。次の文は「疏次云告諸苾芻者」（17左4行）で、これは『無常經』の「爾時佛告諸苾芻」¹⁰の註釋である。「苾芻」に關する註釋は「17左」と「18右」にわたり行われる。まず2-①『疏次云』として苾芻の五徳を比丘のそれと對比して説明する部分を引用し、續いて2-②『心經抄』（17左11行）の比丘五義を引用する。そして2-③「准此所說通名有一」（18右2行）から、苾芻と比丘に關する自説を明らかにする。これを区分して提示すると、次の通りである。

2-① 『疏次云』：苾芻の五徳と比丘

⁸ 以下、斷簡の内容を指示する場合、丁数、左右、行数により示す。これは巻末の翻刻と對応している。

⁹ 義淨譯『佛說無常經』（大正藏17・745下）

¹⁰ 同前

一者體性柔軟出家人折伏身語須柔軟
二者不背日光出家人尙向佛日
三者引蔓傍布出家人學三藏教展轉傳揚燈燈不絕
四者香氣遠聞出家人防乎三業美聲流布
五者觸身安樂出家人常伏三毒復起生死苦

2-②『心經抄』：比丘五義

一曰怖魔初出家時魔宮動
二言乞士既出家已乞食自濟
三云淨持戒漸入僧數應持戒
四云淨命既受得戒所起三業以無貪發不依於貪邪活命
五曰破惡漸依聖道滅煩惱

2-③「准此所說通名有一」

上記の2-①『疏』は『無常新鈔』が引用した註釋書である。省辯以前の註釋書に唐代『法藏疏』や敦煌寫本『正演疏』などがあるが關聯は明らかではない。この内容が共通して現れる章疏で時代が近いものには、唐の栖復の『法華經玄贊要』、宗密『華嚴經行願品疏鈔』、宋の道誠『釋氏要覽』（1019年）、宋の遇榮『仁王經疏法衡鈔』（1024年）、南宋の法雲『翻譯名義集』（1143年）などがある。この中、引用の典拠を記録したのは『法華經玄贊要集』の「安國云」¹¹、『翻譯名義集』の「古師云」¹²であるが、具体的な書名は明らかではない。また、五徳の順序を見ると、遇榮の『仁王經疏法衡鈔』¹³だけ一致し、他のものは第二の「不背日光」が第五に位置している。

2-②『心經抄』は書名から見て『般若經』系統の文獻と推定されるが、斷簡にある比丘五義に関する内容が記述されたものには、良賁『仁王護國般若波羅蜜多經疏』、窺基『妙法蓮華經玄贊』、同『阿彌陀經通贊疏』、澄觀『大方廣佛華嚴經隨疏演義鈔』、佛蘭西國民圖書館藏燉煌本（P.2330）『金剛般若經疏』、曇曠『金剛般若經旨贊』、遇榮『佛說孟蘭盆經疏孝衡鈔』などがある。このうち引用文句がほとんど一致する章疏は『仁王護國般若波羅蜜多經疏』、『金剛般若經疏』、『妙法蓮華經玄贊』、『阿彌陀經通贊疏』である。¹⁴

¹¹ 栖復『法華經玄贊要集』卷8（卍新續藏34・343中）

¹² 法雲『翻譯名義集』卷1（大正藏54・1074上）

¹³ 良賁『仁王護國般若波羅蜜多經疏』卷2（卍新續藏26・450中）

¹⁴ 『仁王護國般若波羅蜜多經疏』卷1（大正藏33・439下）、『金剛般若經疏』（大正藏85・151下）、『妙法蓮華經玄贊』卷1（大正藏34・667中）、『阿彌陀經通贊疏』卷上（大正藏37・333下）。特に『金剛般若經疏』、『妙法蓮華經玄贊』、『阿彌陀經通贊疏』は「乞食自濟」、

この『心經抄』の「訛云比丘由具五義所以不譯」が「18右9行」の『心經略抄』でも引用されている。また『心經略抄』は『新編諸宗教藏總錄』の『般若心經』章疏のうち道歎述の「略鈔一卷科一卷」¹⁵と書名が一致しているため同書である可能性があるが、現段階では推論にとどめる。また省辯と同じ時期に活動した遇榮の『佛說孟蘭盆經疏孝衡鈔』¹⁶でも同様の内容が記載された点から同じ章疏を活用した可能性も考えられる。

2-③「准此所說通名有一」（18右2行）以下は、自説を提示した部分である。すなわち、修行者の名称について、比丘は訛、苾芻は正である。これとは別に怖魔など別名が五つある。唐言に翻譯した五名に「破惑」を加えると六つの名義となる。最終的に『心經略抄』に基づき「比丘」という言葉は總名、五つあるいは六つの言葉は別名である。そして一名だけでは名義が狭くなるが、「比丘」という言葉は、全体を網羅し名義をすべて備えると述べている。

以上の定義の問題とは別に「苾芻」は「苾芻」と書くこともある。『高麗大藏經』と『無常新鈔』の表記は「苾芻」で、他本とその系統が異なっている。これは『無常經』の系統と底本に關聯して今後検討されるべき問題である。

以上、「17左」と「18右」は、『無常經』の本文の註釋で、導入部は特に苾芻に関する註釋であった。省辯の註釋は『無常經』の註釋對象を定め、既存の章疏を活用して集鈔した後、自説を提示していた。

續いて斷簡「18左」と「19右」は、四生、すなわち卵生・胎生・濕生・化生に関する内容である。この箇所は五段に分別されているが、一部が脱落しているため「初略釋名義」（18左2行）以下は明らかではない。まず「五是所依止且名義者」（18左3行）の註釋部分を分類して整理すると、次の通りである。

3-①瑜伽論：五蘊初起爲生依殼而起曰卵生含藏而出名胎生假潤而興曰濕生無而忽有名化生

3-②解云：五蘊初起爲生者此四生之中言生者不同十二支中生支

3-①では四生である卵生・胎生・濕生・化生を分析する。最初に『瑜伽論』を挙げているが、現行『瑜伽論』に同文は見られない。ただ『仁王經疏』、『翻譯名義集』、『金剛般若經旨贊』などに類似した内容が確認される。¹⁷ 3-②解云の解釋は、省辯の自説を展開

「淨持戒」という文句が一致する。

¹⁵ 義天『新編諸宗教藏總錄』卷1（大正藏55・1171上）

¹⁶ 遇榮『佛說孟蘭盆經疏孝衡鈔』卷2（卍新續藏21・556上）

¹⁷ 良賁『仁王護國般若波羅蜜多經疏』（大正藏33・452中）「於中含識唯此四生瑜伽論云、五蘊初起名生也、」；『金剛般若經旨贊』卷上（大正藏85・77上）；『翻譯名義集』6（大正藏54・1165中）

したもので、「生」の内容を、四生、十二支中の生支、四有中の生有との異同に關して述べている。さらに「論言」(18左10行)として典拠を引用して自説を展開している。この内容を見ると、四生の「生」は十二支の「生支」と異なる。「生支」は「中有」を攝して「生支」となる。また四有の「生有」とも異なる。「生有」は、執取結生が一刹那で、ここでの「生」は「中有」を攝し、この「中有位」にあるものはすべて「化生」であるとしている。

續いて「若同生有唯取結生一刹那者何故」(18左9-10行)と述べ、「生有」の一刹那の執取結生が「中有」のそれと同じ理由を尋ね「論言」により答えている。「生」は形體をなす段階だが、「化生」は唯一結生であり、残りの「三有」は、初・後位がある「勝義生後出胎時世人共說此時爲生」(18左13-14行)であり、「一結生」と「初後位結生」に区分される。世俗の「生」というのは、この二つの両方が含まれていることを意味する。以後の2-3行は欠落して不明である。

續く「19右」は、四生の次第について「瑜伽說」(19右2行)を引用し、「解云」(19右4行)として自説を展開している。まずそれらを示す。

- 4-① 瑜伽說、内心思業爲因外殼胎藏濕潤爲緣卵生具四以先說胎生具三濕生具二化生唯一所謂思業藉緣多少如是次第
- 4-② 解云、内心思業爲因者(中略)、五趣分別者(中略)、人化生者謂劫初時人卵生者

4-①は「瑜伽說」とあるが『瑜伽論』に一致する部分は見られない。しかし良賁の『仁王經疏』¹⁸、後代の法雲の『翻譯名義集』¹⁹などに類似する表現が確認される。ここでは四生の「内心思業」に對して「瑜伽說」という文句までそのまま引用している。

4-②解云は、「内心思業爲因者(中略)、五趣分別者」に對する註釋で、「人化生者謂劫初時人卵生者」については「俱舍說」を引用して提示している。「昔有國王名般遮羅其王有妃生五百卵」以下の文章は、玄奘譯『阿毘達磨俱舍論』卷8に王妃の「生卵」が見え

¹⁸ 良賁『仁王護國般若波羅蜜多經疏』(大正藏33・452中4-7)「五蘊初起名爲生也。如孔雀等從卵殼出名爲卵生。如牛馬等從胎藏出名爲胎生。如飛蛾等從濕氣出名爲濕生。如諸天等諸根頓具無而歛有名爲化生。」(大正藏33・452中15-19)、「又瑜伽說。内心思業而爲其因。外殼胎藏濕潤爲緣。卵生具四胎三濕二化生唯一所謂思業。藉緣多小從多先明。辨生勝劣少爲上也。多小從多先明。辨生勝劣少爲上也。人與傍生各具有四。鬼通胎化。天及地獄唯是化生。」
¹⁹ 法雲『翻譯名義集』卷1(大正藏54・1165中)「瑜伽云。五蘊初起。名之爲生。依殼而起曰卵生。含藏而出號胎生。假潤而興曰濕生。無而忽現名化生。如是四生由内心思業爲因。外殼胎藏濕潤爲緣。約藉緣多少而成次第。卵生具四。是以先說。胎生具三。濕生具二。化生唯一。謂思業也。俱舍云。人旁生具四。地獄及諸天中有唯化生。鬼通胎化二。」

るが、文句が一致しない。『無常新鈔』の記述と近いものは唐代普光の『俱舍論記』、法寶の『俱舍論疏』、圓暉の『俱舍論頌疏論本』、宋代遇榮『仁王經疏法衡鈔』、懷遠の『首楞嚴經義疏釋要鈔』などに見られるが、典拠は明らかではない。また、『無常新鈔』の19右13行の欠落部分を以上諸書の記述から探してみると「接取見卵」、「收得」、「接得」などの文句の一つと推定される。それ以下「19左」まで欠落になって明らかでないが、「四生」と關聯した内容を註釋したものと推測される。

次に斷簡「20右」の文頭は『瑜伽師地論』の引用「三由業及潤汚四唯由業」(20右1行)²⁰から始まる。前部が欠落しているため註釋は明らかでないが、『瑜伽師地論』では趣生依止門で業所生の諸有情を一由業及卵殼、二由業及胎膜、三由業及潤汚、四唯由業の四種に区分しており、最終的に四生と關聯したものである。

またこの「20右」では本書の註釋形式を知ることができる。「經其文如疏贊曰第二示無常相」(20右1行)とある部分に着目すると、經文-贊文-註釋對象疏文-註釋の形式をとっている。これを段落ごとに整理すると次のようになる。

- 5-① 經其文如疏
- 5-② 贊曰第二示無常相
- 5-③ 疏寢膳不安者
- 5-④ 大意/意云

すなわち「20右」の註釋は「第二示無常相」に關するもので「生老病死」に言及するが、特に「老と病」の無常相が中心となる。まず『無常經』の經文と贊文とを提示し、續いて5-③「疏寢膳不安者」(20右2行)という疏文を提示し、それに續けて5-④のように「大意」(20右2行)と「意云」(20右3行)として、その意義を明らかにしている。

「20右」の引用資料を見ると、「寢膳不安」・「世情彌篤」(20右3行)・「世事皆息」(20右4行)・「病苦相者四大變異」(20右6-7行)などの文句は窺基の『妙法蓮華經玄贊』、栖復の『法華經玄贊要集』、延壽の『宗鏡錄』、遇榮の『仁王護國般若經疏法衡抄』に見られる。²¹省辯の見解は「大意」や「意云」以外にも、疏文である「疏病苦相者四大變異等者」については、「鄴都云」(20右7行)と「涅槃經云」(20右12行)として、經典と章疏を提示しながら自説を展開している。

²⁰ 玄奘譯『瑜伽師地論』卷14(大正藏30・351上)「又有四種、從業所生諸有情類、於彼彼趣生依止門、一由業及卵二由業及胎膜、三由業及潤汚、四唯由業、又彼彼處受生有情有四種死、一者由自故死、」

²¹ 『妙法蓮華經玄贊』卷5(大正藏34・753上)「名爲老苦、病苦者、四大變異乖適故苦。」、『法華經玄贊要集』卷上(卍新續藏34・213中)、『宗鏡錄』卷上(大正藏42・664上)、『仁王護國般若波羅蜜多經疏』卷上(卍新續藏26・495中)

上記の「鄴都云」に引用された内容を見ると、「如四毒蛇見毒觸毒氣毒齧毒（中略）以四毒蛇盛之一篋」（20右7-8行）は、『大般涅槃經』卷23（『大正藏』12.499中）、「性相乖反」は『大般涅槃經義記』²²、『維摩經義記』卷一末（『大正藏』38・444上）、『淨心誠觀發真鈔』卷中末（『卍新續藏』59・541下）で同じ文句が確認される。「一大増損百一病生」（20右10行）は僧肇の『注維摩經』卷2、「一大爲本所起爲百」（同上12行）は窺基の「說無垢稱經疏」卷3（『大正藏』38.1040上）に同じ文句が見つけられる。また、本文中で『涅槃經』の引用に關聯して「涅槃經云」（20右4行）、「涅槃經云」（20右12行）があり、その内容は「病苦」に關するものである。「20左」は欠落している。

續いて斷簡「21右」と「21左」を見る。「21右」前半の内容は、その前の「20左」が欠落しているためそれ以前との關聯はわからない。「21右」は「如是觀是則名爲修集死想智者復觀」（21右1行）とあり「修集死想」の觀行が中心となる。これは『涅槃經』を引用したものである。²³この「修集死想」は『瑜伽師地論』の修集九想の一つに該当する²⁴。續いて「彼經又云」（21右6行）として『涅槃經』を引用し、²⁵また「又云」（21右11行）として『涅槃經』卷29「師子吼菩薩品」第11を引用している。²⁶以上の經文は死想、生老病死、捨命と關聯した内容である。「21左」第1行の欠落につながる文句は「末摩」（21左2行）で、命終時の「斷末摩」に相當する。續いて「今疏云」（21左2行）として疏文の「斷末摩」の内容を提示している。ここで提示された「風刀解支節無處不苦痛」という文句は、『妙法蓮華經玄贊』、『法華經玄贊要集』、延壽の『宗鏡錄』、遇榮の『仁王護國般若經疏法衡抄』に見られる。²⁷

次に「經其文如疏贊曰第三指無常過患也、經其文如疏贊曰第四愍無常人也」（21左6-7行）と述べ、「無常過患」、「無常人」を提示している。これは「20右」の「經其文如疏贊曰第二示無常相」（20右1行）に續くもので、無常相、無常過患、無常人の一聯の註釋に該当する。

續いて「疏貧窮無福慧等者」（21左7行）に關聯して註釋する。この文句は『妙法蓮華經』方便品の偈頌²⁸などに見られる。まず「鄴都云」（21左7行）として關聯する内容を

²² 慧遠『大般涅槃經義記』卷1(大正藏37・614下)「譬如四蛇性相乖反、四大如是、地堅而重、風動而輕、水濕而冷、火燥而熱、各相乖反。」

²³ 曇無讖譯『大般涅槃經』卷38(大正藏12・589下)

²⁴ 玄奘譯『瑜伽師地論』卷97(大正藏30・856上)「云何名爲修集九想、一者修集出家想、二者修集無常想、三者修集無常苦想、四者修集苦無我想、五者修集厭逆食想、六者修集一切世間不可樂想、七者修集死想、八者修集世間平等不平等想、九者修集有無出沒過患出離想」

²⁵ 曇無讖譯『大般涅槃經』卷29(大正藏12・536下)

²⁶ 曇無讖譯『大般涅槃經』卷29(大正藏12・535下)

²⁷ 『妙法蓮華經玄贊』卷5末(大正藏34・753中)、『法華經玄贊要集』(卍新續藏34・213下)、『仁王經疏法衡鈔』卷2(卍新續藏26・495中)、『宗鏡錄』卷42(大正藏48・664中)

²⁸ 鳩摩羅什譯『妙法蓮華經』方便品第二(大正藏9・9中)「舍利弗當知、我以佛眼觀、見六道

引用している。これは次のように「七聖財」に對應している。

一身淨心入理財、上生抄、一除疑正見財信也
二戒防非止惡財、彼云、二防非離惡財戒也
三聞多聞達廣博財、彼云、三除愚博達財
四慧揀擇是非財、彼云、五揀擇勝劣財
五捨除慳破着財、彼云、四越貪離惡財
六慚崇重賢善(財)(筆者:六崇重賢善財)
缺落(筆者:七輕拒暴惡財)

七聖財は佛道成就の七種聖法に信、戒、慙、愧、聞、施、慧をいう。ここでは「鄴都云」の七聖財を引用して、その中で『上生抄』と「彼云」の異説を提示している。これを説明した「鄴都云」の典拠は不明である。また、『上生抄』と「彼云」の七聖財を検討すると、栖復の『法華經玄贊要集』と遇榮の『仁王護國般若經疏法衡抄』で7つの項目と對應する。

6-①言七聖財等者、安云、一信、除疑正見財、二戒、即七眾戒、防非離惡財、三聞、聞是聞所成慧、除疑博達財、四捨、除貪離染財、捨謂行捨、無貪等三根爲性、或捨謂捨施、亦以無貪爲性、後解爲勝、五慧、簡擇勝劣財、即思修二慧、六慚、崇賢進善財、七愧、輕拒暴惡財、此七之中、信爲首也、問爭知七聖財、信爲首耶、答疏主引顯揚論、排批以信、最爲初首也。(『法華經玄贊要集』卷7(『卍新續藏』34・319中)
6-②七聖財之元胎者元猶初也胎猶始也信爲七聖財之初始也一除疑正見財信也由信除疑心淨正見生眾善故二防非發善財戒也以思種上防發功能爲體三除愚博達財聞慧爲體四越貪離惡財捨施也無貪爲體或是善十一中行捨行捨即依精進及三善根而假立之五揀擇勝劣財思修二慧爲體六崇重賢善財以慚爲體崇敬賢人鄭重善法故七輕拒暴惡財以愧爲體拒者拒逆不順之義不重暴人不順惡法故。(『仁王護國般若經疏法衡抄』卷2(『卍新續藏』26・443中)

以上の内容を本文の「彼云」と比較すると、まず「彼云」三除愚博達財は、6-①三聞除疑博達財、6-②三除愚博達財、「彼云」四越貪離惡財は、6-①四捨除貪離染財、6-②四越貪離惡財、「彼云」の五揀擇勝劣財は、6-①五慧簡擇勝劣財、6-②五揀擇勝劣財にそれぞれ對應する。これを見ると『無常新鈔』の七聖財は、『上生抄』と「彼云」、『法華經玄贊要集』、『仁王護國般若經疏法衡抄』などと内容上に似ているが、文句は一致しない。

衆生、貧窮無福慧、入生死嶮道、相續苦不斷。』、『添品妙法蓮華經』の内容も同一である。

『上生抄』と「彼云」の文句は遇榮の『仁王護國般若經疏法衡抄』と一致する点から引用系統が同じものと推定される。

一方、「21左8-13行」の『上生抄』と「彼云」の関係をみると、5箇所「彼云」は、最初に提示された『上生抄』を指すものと思われる。この『上生抄』は『新編諸宗教藏總録』の『彌勒上生經』の項目に「會古通今鈔四卷已上註明述」があり、『宋藏遺珍』には説明の『上生經疏會古通今新抄』がある。また、『無常新鈔』21左13-14行に「彼云四越貪離惡財捨施也無貪爲體彦云捨者善中行捨也」といい、「彼云」すなわち『上生抄』の引用の中に「彦云」がある。現存『上生經疏會古通今新抄』の巻第2と巻第4には、「彦云」が5カ所見つけられる。²⁹ここから『上生抄』は遼代説明の『彌勒上生經疏會古通今新抄』と考えることができるであろう。ただし「彦云」の典拠と撰者は明らかでない。可能性として『新編諸宗教藏總録』に収録された『彌勒下生經』項目に「鈔二卷齊彦述」という記述があるが、これについては今後の検討が求められる。

以上、斷簡全体の内容は『無常新鈔』という書名にふさわしく、『無常經』や『無常經疏』の中、註解対象を選別して提示し、その意義を提示する方法をとっていた。省辯の註釋は註釋対象を定め、既存の章疏を活用した後、「解云」などで自説を提示するという方法であることが分かった。

4. 『無常經新鈔』と『無常經』の註釋書

『無常新鈔』の註釋史的意義に關聯して、『無常經』とその註釋書の内容を簡単に紹介する。『無常經』の漢譯は『迦梅延無常經』、『色無常經』、『解無常經』、『阿梵和利比丘無常經』、『阿難見伎樂啼哭無常經』、『八方萬物無常經』、『佛說無常經』など諸種が目録で確認される。

これらの中、『迦梅延無常經』は『生經』に『佛說迦梅延無常經第十七』³⁰として収録され、『中阿含經』にも『中阿含大品說無常經』³¹がある。これに對して單獨經典として現傳するのは唐代の義淨譯『佛說無常經』だけである。そのほか諸種の『無常經』は唐代の664年に編纂された『大唐內典錄』の「歷代衆經見入藏錄」、695年に編纂された『大周刊定衆經目錄』にも入藏されておらず、唐代に既に散逸していたことが分かる。

義淨譯『佛說無常經』は『開元釋教錄』の『開元錄藏』に入藏されて以來、ほとんどの大藏經に入藏されて現傳している。これは『開元釋教錄』に小乘經單譯として新譯補闕編

²⁹ 説明『上生經疏會古通今新抄』（宋藏遺珍6）。巻第2に3箇所、巻第4に2箇所が確認される。

³⁰ 竺法護譯『生經』（大正藏3・82下）

³¹ 瞿曇僧伽提婆譯『中阿含經』（大正藏1・609下）

入され、「亦名三啟經」として『三啟經』と呼ばれることもあった。これらの『無常經』の中国の受容と展開については、岡部和雄が漢譯、敦煌寫本、中国佛教文獻への引用など詳細に検討している。³²續いて敦煌寫本であるが、これも岡部を参考にして整理すると次のようになる。スタイン本は18種あり、このうちS.153は『大正藏』巻85に収録された『佛說無常三啟經』である³³。ペリオ本はP.2181、P.3924の2種、P.2305『無常經講經文』³⁴、その他の『無常經』の註釋書ではP.2091（紙背）『無常經疏』がある。北京本には15種の『無常經』がある³⁵。レニングラード本には5種があり、『無常經疏』の斷片がある。敦煌寫本コレクションの『無常經』關聯資料は42種あるが、その全体が分析されておらず、特にその註釋書に對しては十分に分析されていない。また敦煌寫本の中に多数の『無常經』が現存するだけでなく、註釋書や講經文が作成された事例が確認される。特にP.2055の奥書には、「第一齋寫無常經一卷」として、七七齋供養の第一齋（初7日）に『無常經』が書寫されたことが分かる。これは『無常經』が中国でどのように受け入れたのかを究明するための手がかりとなる。³⁶これらの敦煌寫本の存在は、中国における『無常經』とその註釋書の活潑な流通を示すものとして、その意義を指摘することができる。續いて註釋書に移る。『無常經』の註釋書は『教藏總録』に次の三種が挙げられる³⁷。

(無常經)疏一卷 法藏述

(無常經)新鈔六卷科一卷 省辯述

(無常經)直釋義記一卷科一卷 遇榮述

この中、法藏『無常經疏』は現傳せず、その引用も確認されていない。法藏は703年に義淨の譯場に參加して『無常經』と『金光明最勝王經』などの漢譯に證義として活動した。³⁸したがって義淨と『無常經』の内容を詳細に知って註釋したものと思われる。

省辯『無常新鈔』の次にある『（無常經）直釋義記』一卷科一卷は遇榮の撰述である。遇榮は省辯と同時代の人物である。「孟蘭盆經疏孝衡鈔」の序文に「宋廣演大師遇榮」と

³² 岡部和雄、前掲論文。

³³ 本稿の敦煌本略號は、S：スタイン本、P：ペリオ本、北：北京本、Φ、Дx：ロシア本（‘Φ’はK. K. Flugが付けた番號であり、‘Дx’は‘Φ’番號以外の殘卷に‘敦’と‘煌’のロシア語表記の頭文字を付けたものである。）

³⁴ 石破洋「敦煌本無常經講經文の研究—ペリオ二三〇五を中心に」『佛教研究論集：橋本博士退官記念』（1975年）

³⁵ 岡部和雄、前掲論文 698頁。

³⁶ 岡部和雄、前掲論文、699頁-702頁。ここでは宋代までの『無常經』の引用例を提示しているが註釋書については言及していない。

³⁷ 義天『新編諸宗教藏總録』（大正藏55・1172下）

³⁸ 圓照『貞元新定釋教目錄』（大正藏55・869上）

あり、また宋代の『景祐新修法寶錄』によると、天禧三年（1019）から天聖三年（1025）まで譯場で『佛說身毛喜豎經』の翻譯に證義などで活動した。省辯と遇榮の註釋の前後關係は明らかでないが、「疏一鈔一義記」の配列となっていることが注目される。

いま述べた三種の『無常經』註釋書は、『教藏總錄』以外の目録や文獻引用には見られないが、敦煌寫本の中には、白崖寺正演が撰述した『無常經疏』ペリオ本のP.2091（紙背）とロシア本Φ.267の2種が確認される。³⁹この敦煌寫本『無常經疏』（以下、『正演疏』）はP.2091とΦ.267すべて前半部が残っているが、一部の重複した部分があり、同一本であることがわかる。これら敦煌寫本と『無常新鈔』との關聯は明らかではない。すなわちどちらも零本であり、傳存部分も重複していないからである。

『正演疏』P.2091（紙背）の第6張の最後の部分は、『無常經』の「修者咸到無爲岸法雲法雨潤群生」の註釋に、『無常經』の前七字頌7偈のうち第3偈と第4偈に該当する。その註釋の内容は、「頌曰修者咸到無爲岸者下第二嘆法勝德（中略）經法雲法雨者世尊悲智猶若大雲隨緣說法如雨普潤經能除執」である。別のΦ.267『正演疏』は5張が傳存し、第5張の最後の部分は『無常經』の「薄伽梵」の註釋である。この『正演疏』2種は『無常經』の前半部に該当し、一方『無常新鈔』は後半部の註釋であるため、両者は重なる部分がなく内容の比較ができない。

また日本の『無常經』の註釋書としては、江戸中期の性亮が撰述した『無常經策心鈔』2巻が傳存する。これは最初に『無常經』の經題を解釋し、次で本文を解析したものである。この巻下の題名、すなわち巻末題に「臨終方訣」があることから、これが『高麗大藏經』のそれとは系統を異にした『無常經』の註釋書であることがわかる。⁴⁰

以上を要約すると、敦煌寫本の『無常經疏』は白崖寺の正演撰『無常經疏』2種があるが『無常新鈔』と註釋部分が異なるために相互の比較が不可能である。その他の敦煌寫本に多数の講經文や無常偈などがあり、それらの關聯については今後の課題である。

5. おわりに

2018年、『無常經』に關聯して書名だけが傳わっていた省辯の『無常新鈔』が発見された。本稿は、この新出『無常新鈔』斷簡の書誌情報と内容を學界に紹介して研究に役立てることを目的とした。以下内容を要約して結論に代える。

『無常經新鈔』は、宋の省辯が1024年前後に編纂したもので6巻からなる。書名は板尾

³⁹ 李圭甲ほか『敦煌文獻總覽』（高麗大藏經研究所出版部、2011年）

⁴⁰ 『佛書解説大辞典』巻10（大東出版社、1937）409頁-410頁。大谷大の本書の請求記號は餘大2502。解説には、『無常經並臨終方訣附策心鈔』二巻、江戸中期の僧性亮が葬場読誦の經典によく利用された義淨譯の『無常經』に對して科文を付け註釋したもので、まず經題を解釋し次に本文を解析したとある。これは元祿10年（1697）の刊本であり、龍谷大241.7-194、大谷大餘大2502、京專などに所藏されている。

題の『無常新鈔』に基づいて『教藏總錄』入録の省辯『無常經新鈔』と推定した。これは13-14行の板面を持つ7張の斷簡である。松廣寺の所藏章疏は『教藏總錄』に入録された『涅槃經疏』を含む重修本が傳存しており、『教藏總錄』で書名が確認されている教藏と關聯する傳本と見ることができる。

續いて『無常新鈔』斷簡全体を対象として内容を検討した。「17左」と「18右」は、『無常經』の前半の偈頌に續いて出る本文「如是我聞一時薄伽梵在室羅」の註釋である。すなわち斷簡である巻下之一から本文の註釋が始まることになり、それ以前では經題や序文、偈頌などを註釋していることが推測される。「17左」と「18右」は『無常經』本文の註釋で導入部は苾芻の註釋である。

「18左」と「19右」は四生、すなわち卵生・胎生・濕生・化生と關聯した内容が示されている。「19右」は、四生の次第について「瑜伽說」を引用し、「解云」として自説を展開している。「20右」の文頭は『瑜伽師地論』の「三由業及潤汚四唯由業」を引用し註釋している。「21右」と「21左」では死想、生老病死、捨命に關する註釋である。このように本斷簡は『無常新鈔』という書名にふさわしく、『無常經』や『無常經疏』の中の註釋対象を選別して提示し、その意義を提示する方法をとっていた。

續いて『無常新鈔』の註釋史的意義に關聯して『無常經』とその註釋書の内容を検討した。『無常經』の漢譯の中、獨立した經典としては唐代の義淨譯『佛說無常經』だけが現傳する。『無常經』の敦煌寫本は關聯資料が42種あるが、その全体の分析はなされておらず、特にその註釋書は十分に分析されてはいない。

『無常經疏』の註釋書としては『教藏總錄』に入録された3種が代表的なものである。法藏の『無常經疏』は現傳せず引用も確認されていない。『（無常經）直釋義記』一卷科一卷は省辯と同時代の遇榮の著作である。これ以外に敦煌寫本の中で『無常經疏』P.2091（紙背）とロシア本Φ.267の2種の斷簡が確認されるが、これらは白崖寺正演の撰述である。これら敦煌寫本と『無常新鈔』は相互に重複する部分はない。また日本の『無常經』註釋書では、江戸中期の性亮が撰述した『無常經策心鈔』2巻が傳存する。その他、敦煌寫本には多数の講經文や無常偈などがあり、それらとの關聯性は今後検討する必要がある。

<翻譯担当：佐藤厚>

<キーワード>無常經新鈔、省辯、無常經、刊經都監、松廣寺

<參考文獻>

1 一次文獻

省辯『無常經新鈔』斷簡

2 二次文獻

2-1 單行本

小野玄妙ほか『佛書解説大辞典』（大東出版社、1937年）

鎌田茂雄ほか『大藏經全解説大事典』（雄山閣出版、1998年）

李圭甲ほか『敦煌文獻總覽』（高麗大藏經研究所出版部、2011年）

2-2 雑誌論文

石破洋「敦煌本無常經講經文の研究—ペリオ二三〇五を中心に」（『佛教研究論集：橋本博士退官記念』、1975年）

岡部和雄「『無常經』と『臨終方訣』」（『佛教思想の諸問題：平川彰博士古稀記念論集』、1985年）

佐々木教悟「根本説一切有部と三啓無常經について」（『印度學佛教學研究』38、1971年）

釋舎幸紀「根本説一切有部に引用される無常經」（『印度學佛教學研究』67、1985年）

白金銃「『佛説無常經』的傳譯與喪葬禮儀」（『中華佛學學報』20、2007年）

<翻字>

無常新鈔 下之一

■17 (左)

1(脱落)

2故遊城止園證大涅槃故二(脱落)

3説此經居豐德者爲表此經有破四種顛倒之德也

4疏次云告諸苾芻者苾芻即是摩羯陀國之草名也此

5方無故由此不翻彼草具於五德似比丘也故從彼草譬

6況彰名草五德者一者體性柔軟況出家人折伏身語須

7柔軟故二者不背日光況出家人尙向佛日故三者

8引蔓傍布況出家人學三藏教展轉傳揚燈燈不絶

9故四者香氣遠聞況出家人防乎三業美聲流布故

10五者觸身安樂此草若人身有疼痛拂之便息況出

11家人常伏三毒復起生死苦故又依銷釋心經抄云

13梵云苾芻訛云比丘由具五義所以不翻一曰怖魔初

14 出家時魔宮動故二言乞士既出家已乞食自濟故三

15云淨持戒漸入僧數應持戒故四云淨命既受得戒

無常新鈔下之一 十七

■18右

1所起三業以無貪發不依於貪邪活命故五曰破惡漸

2依聖道滅煩惱故准此所説通名有一或云比丘或云

3苾芻但訛正異別名有五謂怖魔等此五別名有名有

4義五義非從草喻彰顯不同前説但有五義而無五

5名五義全依草喻釋也今詳若正云苾芻具前五義無

6別五名若訛云比丘具後五義及五別名故有文云比丘

7此云破惑亦云乞士五義中第二名乞士故正相當矣即

8知比丘翻就唐言具足五名若兼破惑具六名義前別

9心經略抄言訛云比丘由具五義所以不翻者爲比丘一

10是摠名故五六名等是別名故若別名中隨舉一者名

11義局狹若云比丘舉摠攝別名義具寬故諸教中弃狹

12就寬俱云比丘不立餘號但爲不立唐言名故便云不

13翻若不尔者五種名義自(脱落)

14 (脱落)

■18左

1(脱落)

2此四生曲分五段初略釋名義(脱落)

3由四五趣分別五是所依止且名義者依瑜伽論云五蘊

4初起爲生依殼而起曰卵生含藏而出名胎生假潤

5而興曰濕生無而忽有名化生解云五蘊初起爲生者此

6四生之中言生者不同十二支中生支以彼生支亦攝中有

7爲生支故亦不同四有中生有以彼生有唯取結生一刹

8那故此中言生若攝中有一切中有皆是化生卵生等三

9應成雜亂居中有位皆化生故此中言生若同生有唯

10取結生一刹那者何故論言含藏而出曰胎生由此故知

11此中言生取初結生乃至出胎藏或出卵殼成形體位摠

12名爲生化生唯一結生餘三有初後位且如胎生初攬父

13母遺體正結生須是諸聖教説名爲生即勝義生後出

14胎時世人共説此時爲生即世俗生今具攝二名之爲生

無常新鈔下之一 十八

■19右

1 卵濕二生約成形體准此而説何故四生次第如是依

2 瑜伽説內心思業爲因外殼胎藏濕潤爲緣卵生具四

3 是以先説胎生具三濕生具二化生唯一所謂思業藉

4 緣多少如是次第解云內心思業爲因者稍親勝故名

5 之爲因即異熟因但傍招感非是如種現等親因緣

6也殼等稍疎名之爲緣五趣分別者天及地獄唯是化
7生鬼通胎化人畜二趣具有四生解云天地獄趣善惡業
8勝感果速疾故皆化生鬼惡業勝多受化生胎生鬼
9者如餓鬼母白目聯言我夜生五子隨生皆自食
10晝生五亦然雖盡而無飽人化生者謂劫初時人卵
11生者如俱舍說昔有國王名般遮羅其王有妃生五
12百卵生已恐爲災變以小函盛棄殞伽河隨流而
13去下有隣國王因觀水見遣人(缺落)將歸經數日間
■19左 缺落
■20右
1三由業及潤汚四唯由 業 經其文如疏贊曰第二示無常相
2也 疏寢膳不安者寢者臥也膳者食也大意即取臥起
3不安也言世情彌篤等者意云世間情欲雖即篤厚
4奈自老者無力受用故云世事皆息涅槃經云譬如
5貧人貪著上膳細軟衣裳雖復希望而不能得老亦
6如是雖有貪心欲受富樂五欲自恣而不能得疏病
7苦相者四大變異等者鄴都云如四毒蛇見毒觸毒氣毒齧
8毒觸毒此四毒蛇盛之一篋性相乖反四大成身亦復如
9是地堅而重風動而輕水濕而冷火燥而熱性相違害
10故生病苦 一大增損百一病生地大增百一雜病水大增
11百一冷病火大增百一黃病風大增百一風病四大不調四
12百四病同時俱起一大爲本所起爲百涅槃經云譬如有
13人形貌端正爲王夫人欲心所愛遣使逼喚與共交通時
14王捕得即便使人(缺落)
■20左 缺落
■21右
1如是觀是則名爲修集死想智者復觀我今出家設
2得壽命七日七夜我當於中精勤修道護持禁戒說法
3教化利益衆生是名智者修於死想復以七日七夜爲
4多若得六日五日四日三日二日一日一時乃至出息入息
5之頃我當於中精勤修道護持禁戒說法教化利益
6衆生是名智者善修死想彼經又云如我昔告波斯
7匿王大王有親信人從四方來各作是言大王有四大山
8從四方來欲害人民王若聞者當設何計王言世尊設
9有此來無逃避處惟當專心持戒布施我即讚言善哉

10大王我說四山即是衆生生老病死生老病死常來切人
11又云善男子如人捨命受大苦時宗親圍遶號哭懊惱
12其人惶怖莫知依救雖有五情無所知覺肢節戰動不
13能自持身體虛冷煖氣欲盡見先所修善惡報相善
14男子(缺落)

■21左

1時燒燃(缺落)
2末摩此云死節爲於身中有百處支節即命終時有
3異風大增盛力故觸此末摩被觸之時如刀割切苦痛
4之極觸之便死名斷末摩故今疏云風刀解支節無處
5不苦痛非諸有情命終皆斷末摩爲好發言譏刺他人
6他別招此報 經其文如疏 贊曰第三指無常過患也 經其文如疏
7贊曰第四愍無常人也 疏貧窮無福慧等者鄴都云
8謂無法財滋潤財即七聖財也一身淨心入理財上生
9抄一除疑正見財信也二戒防非止惡財彼云二防非
10離惡財戒也以思種上防非止過功能爲體三聞多聞廣
11博財彼云三除愚博達財聞慧爲體四慧揀擇是非財
12彼云五揀擇勝劣財以思修二慧爲體五捨除慳破着財
13彼云四越貪離惡財捨施也無貪爲體彥云捨者善中
14行捨也行捨即以精進及三善根爲體六慚崇重賢善
無常新鈔下之一 二十一

編集後記

東アジア仏教研究会の研究会誌第 17 号をようやく刊行することができました。前年に引き続き、今年も刊行が遅れてしまいましたことを、この場を借りてお詫び申し上げます。

編集にあたりましては、佐藤厚先生（東洋大学東洋学研究所客員研究員）が編集委員長をお引き受けくださいました。また、編集事務責任の松森秀幸先生（創価大学准教授）には、諸先生方への連絡など、大いにお手を煩わせました。それから Tomas Newhall さん（University of California, Los Angeles, 博士課程）には英文タイトルのチェックを担当していただきました。こうして、ひとまず編集を終えることができましたことは、ひとえに皆さまの協力の賜物です。衷心より、感謝申し上げます。

今後も、本学会の活動を通して東アジアの仏教研究が興隆し、たくさんの発見と実りある成果が生まれることを祈念申し上げます。

（編集担当幹事補助 佐久間祐惟）

平成 31 年 5 月 31 日発行

東アジア仏教研究 第 17 号

編集・発行 東アジア仏教研究会

〒192-8577 東京都八王子市丹木町 1-236

創価大学文学部 菅野研究室内

連絡先 Tel 042-691-9381 または eastasiabuddhiststudies@gmail.com

印刷所

株式会社サンワ

102-0072 東京都千代田区飯田橋 2-11-8

TEL03-3265-1816 FAX03-3265-1847